

- 1 派遣期日 令和5年10月13日（金）
- 2 派遣先 学校名 福島県伊達市立保原小学校
所在地 福島県伊達市保原町弥生町15
<http://www3.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=0710099>

3 研修内容

（1）学校概要及び研究主題について

保原小学校は、通常学級19学級、特別支援学級12学級、児童数596名の学校であり、令和4年に創立150周年を迎えた伝統ある小学校である。教育目標である「自ら学ぶ 心豊かな たくましい子ども」を理念とし、学び合いに重点を置いた教育活動を展開している。

今年度の研究主題は「共に学び 共に喜び 共に高め合う 子どもの育成～自ら動き出す課題を設定し、仲間と共に自分の考えを広げ深める授業づくり～」である。学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を通して、児童に各教科等における資質・能力を育成していくことが求められており、保原小学校研究部は以下のように捉え、主題を設定した。

- 課題を自分とのかかわりで考え課題解決に主体的に取り組む。
- 何をどのように追求・解決すればよいか、解決の見通しをもつことができる。
- 既習事項を活かし、これまでの言語活動を活用して、自分の考えを表現する。
- 自分と友達の考えを比較しながら話し合い、考えを広げたり深めたりして協働的に課題を解決する。
- 学習を振り返り、課題に照らして、まとめたり活動の様子を振り返ったりする。
- 学校での学習を活かして家庭で課題に取り組んだり計画を立てて自主学习に取り組んだりすることができる。

研究副主題にある「自ら動き出す課題を設定」において、子どもの実態に即した課題や学び合う必然性がある課題、多様な見方や考え方を引き出すことができる課題が例として挙げられており、「瞬間判断→揺さぶり発問→問い返し」の流れを効果的としている。子どもたちの当たり前を覆し、考えを立ち止まらせ、「課題を解決したい」「本当のところはどのようなのか」と課題づくりの工夫を教師側が意図して授業計画を行っている。

（2）授業参観

写真1では、3年生分数の大きさについての学習である。教師は「同じ分数なら長さは同じか」と児童に問いかけ、様々な意見を児童達で共有した後に、課題を設定していた。実際に計算を通して、もとの長さが異なると同じ分数でも長さが異なることを確認し、計算問題に取り組んでいる。



<写真1>

写真2では、2年生かけ算についての学習である。電子黒板を活用して、求めたいものの数を視覚化すると共に、児童が自らの考えを発表・板書している。その際、教師が「 4×3 と 3×4 だと、どうして答えは同じなのに式が違うのか」と問い返すことで、児童たちに考える時間を設け、自分の考えを深める全体の学び合い活動を展開していた。また、話し合うことで友達の意見から自分の考えを再構成し、違いに気付くことができた児童の姿もあった。



<写真2>

(3) 小教研体育部会 伊達大会（公開授業・研究協議）

公開授業では、5年生マット運動（器械運動）後転グループの技の練習が行われた。授業テーマは「自己の課題を解決するための場を選んだり、ICT 機器を効果的に活用したりすることにより、児童が「わかった」「できた」を実感することができる授業」で、児童の能力や技の種類を考慮した練習の場の設定によるスモールステップや、ICT 機器を活用して自己や友達の動きを撮影し、アドバイスや称賛をしながら取り組む授業を展開していた。

写真3では、後転においてロイター板を活用し、斜面を利用して勢いをつけて練習している。この場以外にも、着地点が分かるように目印をつけたり、真っ直ぐ後転ができるようにマットを組み合わせ溝を作ったりしていた。技が習得できた児童は平らな場で練習をし、別な技へと挑戦していた。

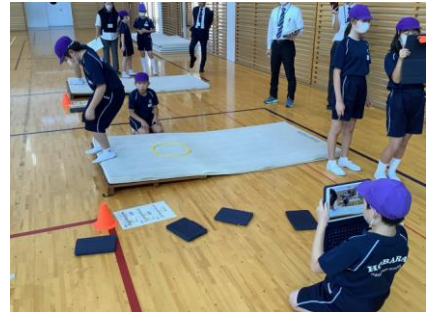
写真4では、実際に撮影した動画をその場で振り返り、アドバイスや称賛をしている。児童たちはスロー再生やアドバイス前後の動画を比較しながら、分かったところ、できたところを学び合いながら技能を高めようとしており、積極的に活動に取り組む児童が多かった。

また、撮影に当たり、教師は「どの視点から撮れば、必要な要素を見ることができるか」と問いかけ、児童たちは撮影してほしい角度を伝えることで、自ら課題を設定、解決に向かおうとしていた。

研究協議では、場の設定、ICT 機器の活用についてを軸とし、15ブロックを4チームに分け、協議が行われた。本授業ではマットの配置をコの字型に設定し、児童たちが互いを見合える授業であったり、ICT 機器の活用のタイミングを児童に判断させて各自活用したりするなど、主体的な活動が多く、低・中学年にも可能かどうかの協議が行われていた。（写真5）

全体指導では、福島県教育庁健康教育課指導主事の田村先生からスポーツライフの実現についてご指導をいただいた。体育科における主体的・対話的で深い学びとは、導入時に「やってみたい」「自分にもできそうだ」と思わせるような課題提示や話す視点の明確化や振り返りの時間を設定する。自分の考えや意見を仲間と共有して深める、気付くことが深い学びにつながると考えられている。

また、運動を「する」だけでなく、「見る・支える・知る」を増やしていくことで、見学者や運動が苦手な児童も参加や助言、一緒に考えることができ、仲間と学ぶよさについて誰でも実感することができ、主体的・対話的で深い学びにつながると、ご指導いただいた。



<写真3>



<写真4>



<写真5>

4 感想

今回の先進校等調査では、自ら動き出す課題の設定や意図した問いかけなど、授業展開において導入がとても重要なものであることを学んだ。児童たちが授業を作り出していけるように教師が様々な手立てや見通しをもち、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて授業計画をしていた。

私も調査後の授業で3年国語「サーカスのライオン」にて、ライオンのじんぎの思いに対して「本当にそう思っていたのかな」と自分の考えを一度振り返られるような問いかけを行ったところ、児童達で対話が生まれ、考えを再構築、自ら発信する姿が多く見られた。今後も、導入や問いかけを意図して児童達に主体的に活動ができるような授業展開を心掛けていきたい。